

いきてる

—死刑廃止問題、正義感、そして感性—

中山 千夏

昨年、絵本を六冊作った。そのひとつ、『どんなかなあ』（絵||和田誠 自由国民社）が、日本絵本賞というのを受賞した。「大賞」ではなくて、いわば二等賞の「絵本賞」だが、それでもびつくりだ。そもそも、出版社にとつても担当の編集者にとつても私にとつても、本格的な絵本は初めての仕事だった。かいま見て感じ入ったことに、絵本の世界もこの社会、自由主義経済社会の出版業界の一部だった。あたりまえの話だが。だから、新規参入のわれわれがノミネートされた、それだけでびつくりしていたのだ。

◇「説教臭い」という講評◇

講評から、どうやらタナボタ受賞らしい、と推測した。私もある賞の選考をしている。その経験からすると、委員の支持が激しく割れた場合に、みんなの「政治的配慮」から、どちらさんにも無難な一つが急浮上して、受賞作に落ち着いてしまうことがある。それだったのだろうか、と思った。激しい議論があったとうかがえることを、何人かの選考者が書いてい

るうえに、われわれの絵本に触れているのは五人中二人に過ぎず、その二つにしても、さほど強く愛着しているふうではないからだ。

その一つ、男性ジャーナリストの講評は、内容は「少し説教臭いが」とふって、絵だけほめている。ひえ、あれが説教臭かったら、説教臭くないのはどんなのよ、と思わず反発した。しかし、すぐに、ああ、そうか、と発見した。

絵本のテキストに、編集者から注文は一切、なかった。それどころか、編集者もADのイラストレーター山下勇三さんも、とにかく自由に、と言ってくれた。自由に書くにあたって、いくつかの方針を立てた。そのひとつが「説教臭くしない」だった。

自分を省みて、子どもは説教が大きらいだと知っていた。だから、ただ子どもを楽しませそうな「おはなし」を書いた。ところが、できてみると、どれもこれもメッセージがあった。70年代、ウーマンリブの片隅に加わって以来、身内にためこんできたいろいろなメッセージが。

こうしなさい、ああしなさい、これはこうです、という直接的な教示は一切ないが、確かにメッセージはある。

子どもたちの反応を見る限り、それらのメッセージは、「おはなし」の深部に隠れおせていた。よしよし、と思った。けれども、おとなが読めば、当然ながらメッセージとしての主題は容易にわかる。差別のこと、性のこと、平和のこと、自由経済主義社会の現状、などなど。そして、私の社会的な発言や行動を知っていれば、それが指し示したい方向まで推測できる。するとそれは、あるおとなには素晴らしいメッセージと受け取られ、あるおとなには臭い説教と受け取られるだろう。そういうことか、と納得した。

◇みんな、かけがえない存在◇

ちなみに、受賞作に隠されたメッセージは、「ひとはみんな違う、違いがあるだけで上下はない、その誰もみんな、かけがえない存在だ、違いを思いやりながら仲良く生きようぜ」みたいなことだ。

思えば、こんなメッセージを説教臭いと感じるようなおとなになってしまわないうちに、子どもたちの「感性」に種をまきたい、それが絵本を書いた時の私の、無意識の魂胆だった。人権を考えるようになってから、理屈ではなく、感性が壁だ、と実感することが多かった。性差別

しかり。死刑廃止しかり。

いきてる いきてる いきてる
いきてるって どんなこと

これは『いきてる』（絵さきめやゆきの冒頭だ。生命のかけがえのなさ、を感性で得てもらいたい、と願って書いた。子どもたちが悪質になったから殺人し、虚弱になったから自殺するわけでは、もちろん、ない。個々の生命のかけがえのなさを、政治と経済がどんどん否定してゆき、結果として、今、生きてあることのわくわくする実感、生命への肯定を、子どもでさえ持たなくなっている。なぜ自分は生きなければならぬのか、なぜ他人を殺してはならないのか、理屈で考えるしかなくなっている。本来、そんなことは、問うまでもなく、当然のこととして、感性が肯定していなければならぬことだろう。特に子どもは、そうでなければならぬ。そうあるように社会を整える責任が、おとなにある。

◇遠いのに死刑廃止◇

生命のかけがえのなさ、を感性で肯定すれば、死刑廃止は当然の帰結になるはず……遠いのに、私はそれを置いていた。フランスが死刑廃止に踏み切った時の法務大臣、弁護士のパダンテールさんも言っていたが、死刑廃止論への反発は、多くがとても感情的だ。私の実感でも、

議論は出尽くしており、死刑制度を保持しなければならぬ理論上の理由は消えた。残るは感情だ。

私が国会にいた当時、法務省は「存置を望む国民感情」を最大の存置理由にしていた。国連が死刑廃止条約を打ち出し、日本でも廃止の機運が高まった90年頃、討論会で対面したある存置派が、こんな意味のことを言った。

「論理的には廃止論が勝つだろう。しかし、死刑は正義の実現だ。廃止すると、正義が実現しなくなる。私はそれを恐れる」

彼は法曹人だった。論理の徒でさえもが、正義感を最後の砦にしている。それが大変、印象的だった。正義を実現させたい、という彼の感情が、死刑の持つ非正義性……誤審による無実の処刑、処刑に当たる人びとへの殺人強制、情状酌量という名のさじ加減に左右される生命、そして死刑の本質は報復殺人であること……に目をつぶらせる。

実は廃止派の多くも、正義感から死刑廃止を求めている。私や多くの廃止論者にとって最高の正義は、生きてある人間を、それがどんな人間であれ、任意に殺さないこと。言い換えれば、基本的人権の尊重、それが私の最高の正義なのだ。基本的人権の考えが論理だけの間は、ころりとひっくりかえって、戦争や殺人

さえ支持する脆さがある。なぜならば、「寿命の限り自由に生きる権利が、万人にある。そして、それを阻害する権利は、誰にもない」というのは一つの考えに過ぎず、そうである以上、考えは変えることができるからだ。

◇生きてあることに対する感性◇

私や多くの廃止派が頑固なのは、それが単なる考えではなく、ひととしての正義感になっているからだ。その意味では、「極悪人は処刑すべきである」という頑固な正義感と、なんら変わりはない。

ただ、違うのは、生きてあること、に対する感性である。生きてあること、を万人について、熱烈に肯定する感性が、強固な廃止派にはある。それを私に気づかせたのは、故・丸山友岐子と故・水戸巖、ふたりの偉大な廃止派だった。彼らに感動して、私は、もともと心底にあった生命への肯定を、守り育てた。

私は生きてありたい。あらゆる他人も生きてありたい。なぜだかそうありたい。その感性が社会に満ちれば、死刑廃止も戦争放棄も実現するだろう。

存置派のおとなには臭い説教かもしれないそのメッセージが、絵本を楽しんだ子どもたちの心にこっそり根付くといひのだけだ。

(なかやま・ちなつ、作家、本会会員)